

「今年の子年はどんな年」

子年は、12支の1番手です。ではなぜ、ネズミが干支の1番手なのでしょう。これにはちょっとした逸話があります。

むかし、神様が、「元旦に早く挨拶に来たものから順にその年の大将にしよう」と動物たちに言いました。それを聞いた動物たちは、我先に1番になろうと元旦を待っていましたが、その中で丑は、歩くのが遅いからと暗いうちに出かけました。それを見ていたネズミは、こっそりと丑の背に乗り神様のもとへ。やがて夜が明け、御殿の門が開くとネズミは丑より早く走り出し1番手になったという話です。

ネズミは、こうした「ずる賢い」「すばしっこい」という印象のほかに、「ペストやコレラなどの伝染病を媒介する」「農作物や食料を荒らす」というイメージもあり、人間には決して評判はよくありません。しかし、ことわざにも登場するように、ネズミは昔から人間の営みに深く関わってきました。

表紙の写真は「ねずみ形ひょうそく」といい、江戸時代ごろ家々の明かりに使われたものです。ネズミが油をなめる習性から、このようなユニークな形のものが作られました。ある文献によれば、すでにネズミ(造りもの)がいると他のネズミ(生きたネズミ)が近寄らないため、油の被害がなくなるからと書かれています。

今年は、子年です。ネズミにあやかり、この変動激しい社会の災難を賢くそして、すばしっこく回避して無事過ごせるよう祈りたいものです。



樹木医・技術士(建設部門) 原野 幹 義

「太古の息吹・ソテツ」

園芸ブームである。人はガーデニングに精を出し、花はますますその美しさに磨きが掛けられ、人々を魅了する。そんな時代に目もくれないで、ソテツはこの時期、ヤシに似た葉に守られ、茎の頂に羅紗状の毛に覆われた雌花を付ける。毛むくじゃらの中から伸びる触角のようなものは、二月になると子供達が喜びそうな怪獣の耳のように開き、卵を抱くカニの如くオレンジの種を付ける。雄花はまるでクリーム色の大きなロケットのようである。



ソテツの実

かつては、異国情緒や重厚な存在感から学校、お寺の玄関などには植えられ、身近にあったはずなのに、ソテツの花を知る人は意外と少ない。コタツで猫にならず、子どもと一緒に近くのお寺に覗きにいきませんか。

以前送られてきた奄美大島の後輩からの写真には、切り立った海岸の絶壁に自生する、蘇鉄の群落の姿がありました。その姿は、重厚さより荒ぶる生命力に満ちあふれ、いつか必ず訪ねてみたい想いが胸の奥にストーンと落ちました。

目次 Contents

市長年頭あいさつ	3
平成19年をふり返って	4-5
財政状況	6-7
市の人事行政の運営状況をお知らせします	8-11
かかりつけ〇〇を持ちましょう	12-13
オーストラリア スタディ・ツアー	14-15
後期高齢者医療制度が始まります	16
無料相談	17
MYスクール・図書館だより	18
まちの達人・読む水族館	19
遊びにおいでよ児童館へ	20
健康カレンダー	21
お知らせ	22-27
クイズまちがいさがし・編集後記	28
ふれあい宅配便	29
男女いきいきフォーラム	30
こどもミュージアム	30



ソテツ雌花



ソテツ雄花